# 大間知篤三の金沢市での講演（1937年5月）における『鳳至郡誌』『能美郡誌』批判を捉え直す

第70回石川県五学会連合研究発表会 ＠金沢大学角間キャンパス
2023/3/5
由谷 裕哉（加能民俗の会）

**発表の趣旨**；民俗学者**大間知篤三**（1900－70）が1937年5月に**石川県図書館協会**主催の講演会で行った講演「**郷土資料の採集**」において，複数箇所なされた『鳳至郡誌』『能美郡誌』批判を対象とする。発表者は同講演の評価を既に由谷[2021a]および由谷[2022]で行っているが，本発表で再検討する。

**大間知篤三とは**；富山市生まれで第四高等学校を経て，東京帝大独文科時代に新人会に入会。四高時代に**中野重治**と同級生だったことがあり（共に同人活動も），**『むらぎも』**などの“太田篤”のモデル。1928年に**三・一五事件**で検挙されて転向。出獄後，大孝塾を経て1933年に**柳田國男**門下に。婚姻・親族などに関心を持ち，柳田による全国山村調査（1934－36）のリーダー格となる。本講演のあった1937年には，柳田との共著**『婚姻習俗語彙』**を3月に上梓していた。1939年より，金沢の歩兵第七連隊志願兵だった当時（1927－28）の上官であった**辻政信**の誘いで**満州建国大学**へ。敗戦後，1953年ころ柳田から離反。

**大間知講演の置かれた文脈と構成**；主催者の石川県図書館協会は，1931年から**「加賀能登郷土図書叢刊」**を刊行していた（『加賀志徴』『能登志徴』『能登名跡志』ほか；refer⇒由谷[2018]）。講演会は柳田國男を顧問として，1937年5月14日から兼六会館で3日間行われた由（大間知講演で，**小田吉之丈**が前日話をしたと）。同協会から1938年7月に**『町村誌編纂の栞』**（小序は柳田國男）として上梓された後半に，大間知講演録が収録。全11パートからなり，民俗語彙採集と複数地域の比較を重視せよ，と云う当時の柳田の姿勢に沿ったもの。『能美郡誌』批判は2「従来の郷土研究の持つた誤謬」に，『鳳至郡誌』批判は10「郷土採集の特徴と弱点」に複数出る（パート10では，『羽咋郡誌』も否定的にではなく言及）。

『能美郡誌』（1923.11）批判（p.72）；『能美郡誌』Chap.30**板津村**の「慣習」の「歯黒」（p.1409）。「女子他に嫁する時は当日までに歯を涅し，知人を集めて饗応す，若し20歳に達する時は，例へ嫁せずと雖も，亦た之を行ひ，嫁する者も十九歳に当れば則ち行はざりき，今は元より此風なしと雖も，尚入嫁の前日饗応を行ふは，其の遺風にして，之を「**やりやぎのよばれ**」と称す」

大間知講演録；「他の地の人が読むと何かもとは葉黒めと関係のあつた言葉かと思はれないでもない書き振り」だと批判。飛騨，越後蒲原および遠江における類似の民俗語彙について参照し，「板津村の**ヤリヤギノヨバレ**といふ語の意味は，嫁を送り出す為の饗宴の意味に他ならない」と論断する。

《cf.「ヤリヤギノヨバレ」 は，北飛騨および能美郡板津村の語彙として『婚姻習俗語彙』p.22に既出》

『鳳至郡誌』（1923.3）批判その1（pp.99f.）；『鳳至郡誌』Chap.22**七浦村**の「慣習」の「葬礼」（p.801）。「死者ある時は，組内の者集り来りて葬儀に関する一切の周旋を為す。然れども決して葬家の饗応の受くるなきの**美風**あり。葬礼は寺院に於てせず，必ず其家に於て行ふを法とす」

大間知講演録；「**美風**」という表現に対して，「それを美風といふ前に，今一つ考へて頂きたいことがある。今日の観念からすれば美風とかたづけて良いものかもしれないが，食はない理由が他にあるのではないか」と疑問を投げかけ，岩手県の山村で死人のある家で食事をすることに対して「**忌み**がかゝる」場合を例示。そうした忌みが「古い日本の我々の祖先の生活では非常に重んぜられたことである」とし，「美風といふやうに今様の常識的な解釈で片づける前にこんな観念が支配して居る為の，もしくは居た為の，結果ではあるまいかといふ点まで吟味して頂きたい」と批判する。

『鳳至郡誌』批判その2(pp.100f.)；同郡誌 Chap.28**町野村**の「慣習」の「迷信」(p.1011)。それを列挙する一文の中で，「土用中に枕を打てば祟るといひ，**盂蘭盆以外墓地に行けば死霊に憑かる**とし，高山祭(旧暦二月九日及び三月二十四日)に山に行くものは負傷することありといひ，(後略)」

大間知講演録；「墓場は非常に怖ろしい所，穢れた所，といふ考え方が，多くの地方に残つて居る」とし，「それは祖先崇拝と矛盾するものではなく」，死霊に憑かれる云々を「そんな問題と結びつけて考へなければならない」とする。さらに，①禍を蒙った例，②墓地の方言，があれば記すべき，とも。

『鳳至郡誌』批判その3(pp.102f.)；同郡誌 Chap.29**柳田村**の「慣習」の「葬儀」(pp.1052f.)。「遺族は四十九日間精進を行ひ，其翌日親戚等**精進見舞**と称して，餅・饅頭等を贈るの慣習ありたれども」

大間知講演録；「**ショージンミマイ**といふ名称が書かれてあつて」内容が良く分かるが，①親戚の範囲は，②贈り物の返しを器物に入れるかどうか，オヒキというかどうか，関連の民俗語彙を調べよ。

由谷[2021a]における上記の評価；能美郡誌の「やりやぎのよばれ」と鳳至郡誌の「美風」は，妥当な批判。後の2点(『鳳至郡誌』批判2と3)は，一種の揚げ足取りになっているのでは(当該論文p.35)。

由谷[2022]における評価；1930年代，とくに後半における「**郷土研究**」には，柳田グループの民俗語彙・比較研究(言語学，人類学で云うetic)主体の流れと，地理学者**小田内通敏**が指導していた**文部省**(当時)の流れとが対立していた。前者が国あるいは日本を知る為の郷土研究であったのに対し，後者は郷土(府県など)の中で自然，歴史，産業交通などの相関からその下位の地域(郡など) の地域性を求めようとするものであった(refer⇒由谷[2017])。大間知の所論は前者に相当(当該書pp.88-93)。

本発表での再検討；上記のように，講演全体の方向性として**民俗語彙の採集および比較研究の必要性**が強調されている(『能美郡誌』批判は、その例)。その意味で，全体としては由谷[2022]の通り。

とはいえ，『鳳至郡誌』批判第1の中で「一般の人が葬家で食事しないとすれば，どの範囲の人が食事をするか」(p.100)を問うべきとし，第3でも，「ショージンミマイ」に関連して「親戚の範囲をもつと明確に記載して頂くと非常に交際関係や義理関係が良く分かる」云々(p.102)と注文を出している。これらは，比較研究を前提とした民俗語彙の採集というより，**対象事例の社会的文脈への関心**では。

加えて，パート10の総論的な箇所で葬式を例として，「経済調査や社会調査とちがつて，一つの葬式といふものと，**部落全体の生活といふものとの相互の関係を全体的に捉えて**，その際の精神や気持や，忌の問題等の深い所，言はれ行はれて居るもの〻背後にひそんで居るものまで，郷土誌の報告に現れて来なければならない」(p.99)と主張するのも，同じ方向性であろう；⇒以下二つの解釈が可能では。

<1> 大間知が戦後に柳田から離反する予兆か(contextual>comparative)。

<2> 柳田の民俗学構想自体に内在する矛盾か(comparative≠contextual)。

{参照文献}

由谷裕哉「石川県における民俗研究の歴史と現状」,『日本民俗学』285，2016

――「小田内通敏の郷土研究の再検討：『綜合郷土研究 茨城県』に注目して」,『京都民俗』35，2017

――『「加賀越中能登」書籍総覧 ―地域コレクション書誌解題　別巻』金沢文法閣，2018

――「戦前における大間知篤三と石川県」,『加能民俗研究』52，2021；←由谷[2021a]

――「柳田國男と大間知篤三の戦前における婚姻論」,『民俗学論叢』36，2021；←由谷[2021b]

――(編)『能登の宗教・民俗の生成』桂書房，2022